

---

# ドラズ日記

Salzman

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ドラズ日記

### 【Nコード】

N8051X

### 【作者名】

Salzman

### 【あらすじ】

ドラえもんズの日常生活を描いています。

どれも一話完結で、連載ものではありません。

## アンラッキーキッド(前書き)

なぜか最近運の悪いキッド。

すると星占いに「苦手を克服すればラッキーになれる」と書いてあった。

さあ、キッドの運命はどうなるのか!?

## アンラッキーキット

「みんな見て見て！」

駆け足でやって来たドラえもんが、校庭の端のあたりで話をしていた他のドラズのメンバーに呼びかけた。

「どうしたであるか？」

「何かいいことあったのか？」

「ほら、ここここ！」

そう言ってドラえもんが見せたのは、街中まちなかで無料配布されている情報誌だった。

「なになに…えっ、ドラ焼きの特売!？」

「1個20円!これは安いですね！」

「しかもとつても大きいし、とつても美味しそう！」

「ガウガウ！」

「この雑誌よく見つけたな！」

「いや、たまたまこのページが開いたまま落ちてるのを見つけて、近くにまとめて置いてあったから取ってきちゃった。」

「それはラッキーだったな！」

…いや、これはアンラッキーの始まりだった…

「でもこれ、この雑誌についてる券がないと買えないみたいですよ。」

「大丈夫、ちゃんと7部取ってきたから！」  
そう言つてドラえもんはポケットから雑誌を6部取り出した。  
みんなはそれを取つて同じページを開いた。

…その時、キッドが叫んだ。

「おいつ、俺のやつ券ついてないぞ！」

みんなは答えた。

「えっ？僕のはついてるよ。」

「我輩もあーる。」

「私のもちゃんとありますね。」

「俺のもあるぜ？」

「ガウガウ。」

「なんだよ俺だけかよ！なあ雑誌交換しねえか？」

「だめ、これ僕のー。」

「我輩もそれはいやであーる。」

「私もいやですよ！」

「俺だつて無理だ！」

「ガウガウ！」

「じゃあせめてじゃんけんで決めねえか？」

「僕たちには出来ないよ。」

「手が手であーるからな。」

「そもそもあなたがその雑誌選んだんですからね。」

「そつだ！諦める！」

「ガウガウ！」

「ちくしょう、みんなして…なあドラえもん、フエルミラー貸してくれねえか？」

「反対に映っちゃうよ。」

「いや、2回使うんだ。」

「ああ、なるほどね。…あ、でもこの券ちゃんとコピーガード用のインクで印刷されてるみたい。」

「ホントかよ…じゃあバイバインはどうだ？」

「それもガードされてるよ。」

「それじゃあもう一部取ってこようぜ。」

「これちようど最後だったんだ。」

「じゃあタイムマシンでちよつと前に戻って…」

「いや、このインク、時空間飛び越えたら消えるようになってるらしいよ。」

「うう…ちくしょう！なんでどれもだめなんだよ！」

案がごとごとく打ち砕かれて、キッドは怒りかけていた。

「あ、そういえば…」

ドラえもんは違うページを開いた。

そのページにはその月の星座占いが書かれていた。

「確かキッドは…あ、やっぱり。『自分の苦手を克服しよう。克服できてからはラッキーな日々が、克服できるまではアンラッキーな

日々が続きそう。』だってさ。」

「なるほどねー。」

「確かに今月のキッドは運が悪いである。」

「昨日も服引っ掛けて破いてましたね。」

「一昨日も画鋏踏んでたな。」

「ガウ…」

キッドは言った。

「何だよ、所詮占いだろ？そんなの全部たまたま…グワッ！」

ドスッ、という音と共にキッドはよろめいた。

「すいませーん、ボールとってくださいーい！」

「…ホントにツイてないね…」

「さすがに可哀相である…」

「というか大丈夫ですか？」

「結構な音したけど…」

「ガウガウ？」

「どう？痛む？」

「結構…痛い…」

数分後、キッドの痛みがだいたい収まるのを待ってからみんなは言った。

「やっぱり占い信じようよ。」

「そうであるな。」

「占いの言う通りあなたの『苦手』を克服してみたらどうですか？」

「じゃないと今怪我しっぱなしだぜ。」

「ガウガウ。」

「そうだよキッド。僕たちも協力するからさ。」

しかしキッドは返した。

「いや！俺は占いなんか信じねえぞ！…そんなことよりドラ焼きの調味料買いに行かねえか？俺はもう普通にドラ焼き買うからよ。」

「そうですね。私も醤油切らしているので。」

「僕も行くー！」

キッド、王ドラ、そしてドラリーニヨは近くのスーパーへ向かった。

20分後、3人は帰ってきた。

なぜかキッドだけ浮かない顔をしていた。

「キッド、どうしたの？」

「…ケチャップとマスタード、どっちも売り切れてた…」

王ドラとドラリーニヨも続けて言った。

「私も初めて見ましたよ、スーパーで調味料が売り切れてるなんて。」

「醤油もタバスコもいっぱい置いてたのにね。」

そして、ついにキッドは言った。

「占い……信じるよ。」

すかさずマタドローラが言った。

「よし決まりだ！じゃあこいつの『苦手』克服させようぜ！」

「えっと、キッドが苦手なのは……」

「えっ、俺が苦手なもの？そんなもんあったっけなあ？うん、ないよな、やっぱ克服しなきゃいけないもんなんて。」

「なにとぼけてるんですか。『高い所』でしょ。」

「みんな知ってるであーる。」

「でもどうやったなら治せるんだらう……」

「ガウ……」

少しして、王ドラが案を出した。

「……じゃあジェットコースターにでも乗せましょうか。」

その言葉に真っ先に反応したのはキッドだった。

「お願いだ！それだけはやめてくれ！せめてもう少しハードルを下げてくれ！」

「いや、でもさっきスーパーで福引きしたら遊園地のジェットコースターの無料チケット当たったじゃないですか。しかもちょうど7枚。」

「えっ、そうなの！？」

「それはグッドタイミングであーる。」

「これはもう決まりだな！」

「ガウガウ！」

「頼む！ジェットコースターだけは……おい、離せマタドローラ！王ド

ラもなに嬉しそうに腕つかんでんだよ！両腕つかまえるなんて卑怯だぞ！ドラえもんもどこでもドア出すな！やめろー！……」

ドラえもんズの7人はジェットコースター乗り場に来ていた。

「わーい、わーい、ジェットコースターだー！」

ドラリーニヨは一人はしゃいでいた。

それとはまるつきり対照的に、キッドのテンションはこれ以上ないほど下がっていた。

「…なあ、今からでも考え直さないか。」  
キッドは震えながら言った。

「何言ってるんだよ、ここまで来て。」

「そうですよ。それに苦手克服しないと今月中良いこと無しですよ。」

「あ、次僕たちだよ。」

その知らせを聞いて、キッドの震えはさらに激しくなった。

(こいつ、めっちゃ震えてる…)

(本当に怖いんですね…)

「はい、では次の方どうぞ。」

案内の人に従って7人は乗り込んだ。

いや、キッドだけは無理やり連れ込まれたと言った方が正しいだろ

う。

そのジェットコースターに乗せられたキッドは、王ドラとマタドールの間の席でうずくまって震えていた。

「じゃあ発車しまーす！」

と言われると、車体はゆっくりと進みはじめた。

そして、30度ほどの坂を上りはじめた。

(…どんどん上ってってる…どのくらいの高さなんだろう…ああ、考えるだけでもぞつとする…早く下りてくれ、早く…)

しかし車体は下りて行かない。

まだ下りて行かない。

(…まだ?)

その時ドラリーニョの声が聞こえた。

「あれえ?ジェットコースター止まっちゃった。」

「そうみたいである。」

(なんだとー!?!んじゃまさか俺たちは今…)

キッドは恐る恐る顔を上げてみた。

キッドの予想は残念ながら当たっていた。

車体は地上から15メートルの所で静止していた。

「うわああああー！ー！早く下ろしてくれええええー！ー！ー！」

突然の事態に騒ぎ出すキッド。

しかしいくら叫んでもどうにもならない。

「助けてええええー！ー！もう無理だああああー！ー！ー！怖ああああいいいい！ー！そうだ、尻尾を！」

キッドはセーフティガードの中でもう無我夢中に体を動かさず、何とか自分の尻尾を引っ張った…

気づいたらキッドは地上のジェットコースター乗り場前にいた。

「さあ、起きるであーる。」

「キッド大丈夫ー？」

「ああ、大丈夫だ…んであの後どうなったんだ？」

「色々大変だったんだよ。」

「そうですね。警備の方が来てくれたのですが、あんな所で130kgもあるキッドを運び出すの、見ててこっちもヒヤヒヤしましたよ。」

「俺たちはドラえもんのタケコプターで下りたけどな。」

「そうか、そんなことが…悪かったな。」

「そんなことより、ジェットコースターが止まったお詫びとして別

のチケットもらいましたよ。」

「え、そうなのか？じゃあそこ行こうぜ！」

「俺たちもそのつもりだったよ。」

「もらった瞬間に全員一致で行くことになったのである。」

「ガウガウ。」

「お、それは偶然だな！じゃあ早く行こうぜ！高い所はもうたたくさ  
んだ！んでそれはどこなんだ？」

すると、なぜかまた王ドラとマタドーラが笑顔でキッドの横に立っ  
た。

そしてドラリーニヨがキッドの質問に答えた。

「次は観覧車だよー！」

「こここの観覧車、広いねー。」

「7人とも入るなんてなかなかないである。」

「ガウガウ。」

「おい、学校見えるぜ！」

「あ、ほんとですね！」

「ねえ、キッドも外見ようよー。」

「うるさい！お前らだけで見てろ！また無理やり連れ込みやがって  
！」

キッドは一人観覧車のど真ん中で丸まっていた。

「そもそも今日ここに来たのはキッドの苦手を克服して悪い運を追い払うためですからね。」

「それを忘れてはいけないである。」

観覧車は後1、2分で最上部に着くところまで来た。

しかしキッドは相変わらずうずくまっっている。

「一回でも良いから外見てみなよ。」

「そうですね。じゃないと苦手を克服したことになりませんよ。」

「やかましい！お前らには何ともないのかもしれないけど俺には怖いんだよ！」

「いや怖いから見るんだろ！それが『克服』だろ！」

「良いんだよ！所詮占いだろ！克服してもしなくても一緒だよ！」

「一人だけ券なくて調味料買えなくてボールぶつけられてジェットコースター途中で止まっても所詮占いなんですか？」

「そうですね。占いを甘く見てはいけないである。」

「そういえばドラマメッドの占いもよく当たるもんねー。」

「ガウガウ。」

「うう…。」

(確かに最近の俺はツイてなさ過ぎる…)

「…わかったよ！見りゃいいんだろ！」

観覧車がちょうど一番高い所に来た時、キッドはいきなり立ち上がって窓から外を見た。

そしてそのまま止まり続けた。

体は震えている。

手も震えている。

そして足も。

しかし、歯を食いしばりながら顔だけは外を向きつづけた。

そのまま10秒ほどが過ぎ、その後すぐにキッドは初めと同じ体勢に戻った。

よく見えないが、少し泣いているらしい。

「キッド…」

気づいたら地上の観覧車乗り場の前にいた。すると、他のみんなが話しかけてきた。

「よく頑張りましたね。」

「いきなりだからビックリしちゃった。」

「ガウガウ。」

「まあこれでお前もラッキーになれるだろ。」

「うん、そうだね。」

「そのはずである。」

「…そうか…俺やったのか…そうか！これで俺はもう悪運に付きま  
とわれないで済むんだ！」

これ以上ない満面の笑顔を見せるキッド。

それを見てみんなも笑った。

「さあ、帰りましょう。」

「そうだね。じゃあどこでもドア出すね。」

その時、キッドがどこかを指差して言った。

「おい、あれって…」

そう言われて、みんなはそちらの方向を振り向いた。

キッドの手の先には…

「あ、あの雑誌が置いてある！」

「しかも最後の一部みたいですね！」

「俺とっってくるわ！」

そう言ってキッドは走って雑誌を取ってきた。

中にはちゃんと例のチケットがついていた。

「やっとゲットしたぜ！」

より一層喜ぶキッド。

そして周りのみんなも一緒になって喜んだ。

「じゃあ帰ってすぐドラ焼き買いに行こう！」

ドラズの7人はどこでもドアを通つてもといた場所に帰った。

「あ、置いてた雑誌はそのままだったね。」

「まあドラ焼き好きな人なんて俺たち以外にそんなにいないからな。」

「それよりあと10分で特売始まっちゃうよ。」

「そうだ！せっかく俺もチケットを手に入れたんだから間に合わなかったら…あれ？」

「どうしたんだ、キッド？」

「…俺のチケット、真っ白になってる…」

「あ！それどこでもドアを通ったから…」

…沈黙が続く…

「…まあ所詮占いですからね。」

「そんな簡単に当たらないであーる。」

「それにそんなすぐに運がころころ変わったりする方がおかしいよな。」

「ガウガウ。」

「そうだよー。」

「あ、そろそろ行かないと時間まずいよ。」

「じゃあさっさと行って買ってこようぜ！」

「そうですね。せつかくのチケットですし。」

「ガウガウ。」

「じゃあ買ってくるぜ！じゃあまた後でなキッド！」

それからもキッドの悪運がなかなか消えなかったというのは言ってもない。

## アンラッキーキッド(後書き)

なんか思いがけずしんみりとした方向へ…

まあ最後に修正w

## Trick on Treep(前書き)

昼明けの授業にいつも寝ていたマタドローラ。

ところが、そんな彼もある時を境にほとんど寝ないようになります。

一体何があったのでしょうか？

## Trick on Tree p

ピピピピピ、ピピピピピ、ピピピピピ、ピピピピピ…

「…ああ、もう時間ですか…」

午前四時。

空はまだ暗く、路上を行き交う車もまだほとんど見当たらない。

まもなく晩秋に入ろうとしている早朝の鋭い肌寒さは、起きたばかりの王ドラの目をすぐに覚まさせた。

「…じゃあ行きますか」

王ドラは前日に用意していたものを袖の中にしまって、家の外へと出て行った…

午後一時。

午後の授業の開始を知らせるチャイムが学校内に鳴り響いた。

その音を聞いたドラえもんズとそのクラスメイトはみんな席についた。

「あー、次は社会かー」

キッドが重々しい声で言った。

「あつ、教科書忘れた!」

キッドの言葉を聞いてドラリーニョが声を上げた。

しかし、すかさずドラメッドが返した。

「だから、社会は毎回配ったプリントを使うから教科書はいらない  
である」

「あ、そっかー、忘れてた!」

「…ドラリーニョはもの忘れが激しすぎるのである…」  
もはや口癖となったこの言葉をドラメッドは呟いた。

その会話をドラニコフは、毎回お疲れさまと言わんばかりに苦笑い  
して眺めていた。

「しかし、社会の授業って講義を聞いてたまにプリントに何か書き  
込むだけだから退屈だよなー」  
マタドーラが眠そうな声で言った。

しかし、それには王ドラが反論した。

「何言ってるんですか、寝てばかりいるくせに。授業中は寝たら  
ダメなんですよ!」

「いいじゃん、眠いんだから…」

「ダメです!そんな理屈通るわけないじゃないですか!」

「スペインでは普通なんだよ」

「普通じゃありません！スペインの人たちがシエスタするのは…」

王ドラがそう言いかけたのを遮って、マタドローは扉から入ってきた先生を見てこう言った。

「あ、先生来たぜ、じゃあお休みー」

そのままマタドローは授業前の礼もすることなく、一人夢の世界へ入って行った。

授業が始まってから15分が経過した。

クラスの半分くらいの生徒がすでに眠そうにしている。

しかし、みんな眠気に負けないよう、ほっぺたをつねってみたり、ペンの先を手に軽く刺してみたりと、様々な努力を費やしていた。

だがその中でマタドローだけはぐっすりと眠っていた。

その後ろの席から王ドラは、半ば呆れながら気持ち良く眠るマタドローの様子を見ていた。

（ホントにもうマタドローは…スペインの人がシエスタするのは午後からの仕事の効率を上げるためであって、こんな風にサボるためにやってるわけじゃないのに…しかも先生に礼もせずに…）

思い返せばマタドローラは、この昼明けの授業で起きていたことがほとんどなかった。

彼にとつて、この時間の睡眠は生活サイクルの一環となっているようであった。

このスタイルは少しひど過ぎるのではないかと思い、王ドラはつづいてマタドローラを起こそうとした。

しかし、マタドローラはピクリともせず、机に突っ伏し続けていた。

(…これは、一回懲らしめとかないといけないですね…)

(魏と呉と蜀の三国が…えー、このよくわかんない漢字全部覚えるの!?!というかそもそも何て読むの?)

やっつけられないよと軽くあくびをするドラえもんのもとに、小さなメモが送られた。

そこには、

「『ゆめグラス』と『ゆめコントローラー』貸してくれませんか?」  
と書いてあった。

メモが回ってきた方を見ると、斜め前の席で王ドラがにっこりと微笑んでいた。

ドラえもんは首を傾げながらも、先生の目を盗んで頼まれたひみつ道具を手渡した。

両方を受け取った王ドラは、先生が見ていないのを確認してゆめグラスをかけ、早速マタドローラがどんな夢を見ているかを確認した。

しかし、グラスを通して見えた夢の中のマタドローラを見て、王ドラはさらに呆然となった。

なんと、夢の中でも寝ていたのである。

(…これはひどいですね…本当にもう二度と寝ないように反省させないと…)

午後三時半。

放課後になり、キッドとマタドローラ、そして王ドラは集まっておしゃべりしていた。

「しかし今日の社会も退屈だったなー」  
キッドは2時間前を思い出しながら言った。

「そうですか？三国志面白いじゃないですかー」

「お前は中国のロボットだからそう感じるんだよ」

「でもマタドローラはちょっと前スペインの歴史をやった時にも寝てましたよ」

「うつ…いいんだよ歴史なんてよ！過去なんか振り返らずに前向いて行こうぜ！」

「でも反省しなかったらいくら先に進んでもちつとも向上しませんよ」

「反省なんか面倒なことやってられねえよ！」

「…そうですか。そういえば今日の社会の授業中、それまでずっと寝てたのに突然ビクっとなって起き上がってましたけど、あれ何だったんですか？」

「そういえばそんなことあったなー。かなり周りに笑われてたよな」

「ああ、あれは…うん、なんでもねえよ。それよりこないだテレビで…」

その言葉を遮って王ドラが言った。

「本当になんでもなかったんですかー？実は夢で怖い思いをして、そのままあなったりしたんじゃないんですかー？」

それを聞いてマタドローラはギクツとなった。

「あ、その様子は凶星ですねー」

王ドラが意地の悪そうな笑顔を見せて言った。

「おいおい、どんな夢見てんだよ」

「…いや、夢の中でたくさんドラ焼きに囲まれてて、それずっと食べてただけど、なぜか全然お腹いっぱいにならなくて、こりゃいいやと思っでずっとなべてただけど…」

「けど？」

「…いや、もういいじゃん！それよりテレビでドラ焼きの…」

「けどなぜか急にお腹いっぱいになってきてお腹痛くて動けなくなっちゃったんですよー」

またマタドローラがギクツとなった。

「お前…カツコ悪いな」

「いやいや俺がそんな醜態晒すわけが…」

必死で反論するマタドローラを制して王ドラが話を続けた。

「そして苦しくて動けずにいるマタドローラの所に牛が何頭も猛スピードで走ってきて、どうにか対処しようとしたけど苦しくて何もできずにいて、もうすぐぶつかるといって目で覚めたんですよー」

「…おい、鬪牛士」

「…うるさい！本当に苦しかったんだよ！…てか何でお前が知ってるんだよ！」

「そんなの簡単ですよー」

王ドラが落ち着き払った様子で答えた。

「私が操ってたからですよ」

「…お前が操ってた？」

「そうです。ドラえもんにゆめグラスとゆめコントローラーを借りて…あなたがあまりにも気持ちよさそうに寝てるので、一回懲らしめとかないといけないと思ひましてね。これでもう授業中寝ませんね？」

にっこりと笑って王ドラはマタドローラに聞いた。

しかしマタドローラは黙ったまま何も答えなかった。

それを見て王ドラは笑顔のままこう言った。

「あっ、そういえばマタドローラ焼き食べる前は夢の中でさらに寝てましたね。その時どんな夢見てたかなー…」

わざとらしく思い出すようにする顔を見せる王ドラに、マタドローラは慌てて言った。

「ちよっ、そっちはダメだ！思い出すな！」

「お前どんな夢見てたんだよ」

「あ、思い出しましたー！確かマタドローラの周りに今度はドラ焼き  
じゃなくて…」

王ドラが続きを言いかけたところでマタドローラが慌てふためいて叫  
んだ。

「やめろ！それ以上言つな！わかった！もう授業中寝ないから！」

「…本当ですね？」

「…ああ、約束するよ！」

「寝たらまたやりますよ」

「うっ…いや、もう寝ないから大丈夫だ！」

「そうですね。ちゃんと反省してくれたみたいですね。じゃあ明日  
から頑張ってくださいね」

「…おう！」

マタドローラがそう言うと、王ドラは教室の外へと去って行った…

ピピピピピピ、ピピピピピピ、ピピピピピピ…

「…ふあああー…」

午前七時。

いつもの通りマタドローは目覚めた。

窓の向こうでは、太陽がオレンジ色に光って見える。

2つ見えるのはまだ目がちゃんと働いていないせいなのだろう。

その予想が当たっていたのか、気づいたら1つへと減っていた。

「…夢か…」

マタドローはそう呟きながら体を起こし、いつもと同じように朝食を食べ、学校へ向かった。

その日の昼明けの授業は社会だった。

みんなが眠そうにしている中、なぜかいつも寝ているはずのマタドローは、時々後ろの席を確かめながら、どこかびくびくした様子で真面目に授業を受けていた。

そしてその後ろの席では、エドドラがずっと得意満面の笑みを浮かべていたという。

## Trick on Treeep (後書き)

最後の夢オチはふと思いついたので入れてみましたw

シエスタはどうやらスペインでももうあまりやってないらしいですね。

結構良い制度なんじゃないかなと僕は思うのですが。

僕も授業中たまに寝てるので、こんなひみつ道具できたら困りますねw

### 追記

サブタイトルを変更しました。

と同時に、偶然ですが裏設定ができたので軽く紹介しておきます。

ハロウインの時に使う「Trick or Treat」の「Trick」は「いたずら」という意味ですが、

このサブタイトルにおける「Trick」の意味は「計略」です。

もちろんこれは「王ドラの計略」ということです。

そして「Treeep」は僕が作った言葉で、

「Triple sleep」(三重睡眠)を略したものです。

これは僕がとっさに思いついた夢オチのおかげで三度起きることになったマタドラーの睡眠のことをさしています。

つまり、サブタイトルの意味は、

「三重睡眠への計略」です。

「『三重』睡眠への計略」です。

…ということは、王ドラの計略は一体どこまでなのでしょう？

それがわかったあなたには、最後にマタドーラが後ろの席を確認した時に王ドラが満面の笑みを浮かべていた理由がわかったのではないかと思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8051x/>

---

ドラズ日記

2011年11月16日19時17分発行